



デュルケーム／デュルケーム学派研究会

Japanese Association for Durkheimian Studies

ニューズレター

第16号 [2015年12月25日発行]

編集事務局 奈良女子大学文学部

TEL 0742-20-3264, 3259

編集

中島道男

江頭大蔵

小川伸彦

<mnakajima@cc.nara-wu.ac.jp><egasira@law.hiroshima-u.ac.jp><ogawax@dream.com>

郵便振替口座番号：00980-4-20999

(口座名称) デュルケーム研究会

デュルケーム／デュルケーム学派研究会の趣旨

世紀転換期のグローバルなレベルにおける社会的、文化的な変化の中にあつて、最近、国際的にも国内的にも、デュルケームやデュルケーム学派の業績の再評価の機運が高まってきている。わが国においても、若い世代を中心としてデュルケーム／デュルケーム学派に関心を抱く研究者が増えつつある。

このような状況を考慮に入れつつ、前世紀転換期の古典であるデュルケーム社会学、および、その発展型としてのデュルケーム学派について調査・研究することによって、現世紀転換期の社会・文化・人間の構造や動態を分析・説明・解釈するための基礎的・原理的なパースペクティブを明らかにしたい。このために、相互啓発的な研究会を定期的に開催する。

第30回研究例会（2015年4月18日、文京学院大学 本郷キャンパス）

報告1 野々村元希 氏（同志社大学大学院）

デュルケームの「道徳的個人主義」について

コメンテーター：杉谷武信 氏（日本大学）

報告2 小関彩子 氏（和歌山大学）

永遠の真理と変化する実在

——デュルケームとベルクソンにおける言語的観念の役割

コメンテーター：太田健児 氏（尚絅学院大学）

第31回研究例会（2015年10月10日、奈良女子大学）

第1部：自由報告

報告 飯田剛史 氏（大谷大学）

9.11テロからイラク戦争へ——「集合意識」による解明・試論

コメンテーター：林 大造 氏（神戸大学）

第2部：科研関連ミニシンポジウム

報告 江頭大蔵 氏（広島大学）『自殺論』の解釈史——A. ギデンズの場合』

岡崎宏樹 氏（神戸学院大学）「バタイユのデュルケーム解釈」

中島道男 氏（奈良女子大学）「パウマンのデュルケーム解釈」

白鳥義彦 氏（神戸大学）「パーソンズに対するデュルケームの影響」

横山寿世理 氏（聖学院大学）「アルヴァックスに対するデュルケームの影響」

【第30回研究例会報告要旨】

〔報告1〕 野々村元希（同志社大学大学院）

デュルケムの「道徳的個人主義」について

本報告は、エミール・デュルケムの「道徳的個人主義(l'individualisme moral)」という概念の意味を理論的に再検討するものである。道徳的個人主義は、個人主義者としてのデュルケムの側面が注目されるようになった1970年代以降、デュルケム社会学における中核的な概念としてさかんに論じられてきた。しかしながら、道徳的個人主義という概念そのものの意味や全体像については、いまだ十分に汲み尽くされてはいないのではないか。こうした問題意識のもとで、本報告はいま一度「道徳的個人主義とは何か」という問いを立て、これに回答を与えることを目的とする。その上で、デュルケム社会学の全体を道徳的個人主義という観点から一貫して理解する可能性を示したい。

とはいえ、デュルケム自身、この概念について多くを語っているわけではない。ゆえに、本報告では個人主義、集団主義、およびフランス共和主義に対するデュルケムの立場を検討することで、道徳的個人主義の輪郭を明らかにしていくことにする。

まず、個人主義について。ここではデュルケムの社会契約説および功利主義に対する立場を確認した。デュルケムにとって、社会契約説と功利主義は「個人の諸権利は個人の本性そのものに由来する」という考え方を共有している。彼は、個人を一個の自己完結した存在とみなすこうした個人観を退け、個人をめぐる社会の見方に注目する。彼にとって重要なのは、事実即して個人に対する「社会的作用力(l'action sociale)」を明らかにすることだ。すなわち、彼は方法論的な意味での個人主義を批判するのである。

しかし、続く集団主義についての検討で明らかになる通り、彼はたんなる方法論的集団主義に立つわけでもない。初期の『社会分業論』において明確に対置される傾向にあった個人と集団という方法論的な区分は、徐々に決定的な意味をもたなくなっていく。デュルケムの方法論上の立場は、個人と集団を、相互に浸透し、影響しあう全体としてとらえる立場だ。彼は両者の間に循環的な相互作用を認めるのである。

ここで、この立場があくまでデュルケムの方法論的立場だということに注意しなければならない。それはデュルケムの価値的立場とは異なる水準にあるものだ。ここからはこの価値的立場を検討するために、デュルケムとフランス共和主義とのかかわりを見ていく。デュルケムは、社会の統合原理を論じる上で人間の「人格(la personne humaine)」の普遍的価値に準拠し、その価値を熱心に擁護するという点において、また、その価値を認める上で国家の役割を強調し、公共的・共同的事柄を重視するという点において、フランス共和主義の系譜に連なる存在である。それでもデュルケムは、共和主義の普遍主義的な抑圧を批判し、中間集団の重要性を主張した。また、デュルケムは普遍的な「人類」への愛着を喚起するが、これは共和主義の祖国愛に対する批判として理解することができる。デュルケム的共和主義と呼ぶうるものがあるとするれば、それは自国の内部において人類の普遍的利益の実現を目指す思想、すなわち国家の内部において国家を超えることを目指す思想である。

以上の検討を踏まえて、ここでは道徳的個人主義を次のように定義した。それは、個人と社会の相互承認によって普遍的な価値を付与されてきた、個人の人格を尊重すべきであるとする思想である。一方で、人びとが理想とする価値は、すべて社会によって生み出され、その正当性を保証されている。近代における人格の普遍的価値は、歴史を通じて社会的に承認されてきたものであって、個人の先天的な本性ではない。他方、その過程では、常に個々人の結合が大きな役割を果たした。人格の聖性を確立し、それを集合的な規範として共有するためには、多くの人びとが集まり、その価値の普遍性を主張することが必要だろう。それはフランス革命という出来事として実現した。デュルケムが注目するのは、

個々人が人格の価値を望み、訴え、それを社会が認めるという相互の歴史的・社会的プロセスである。

道徳的個人主義において、個人主義と集団主義とは対立せず、相補的な関係を取り結ぶ。このことは、対立する既存の思想を総合するという視点を提供する。本報告は、この点からデュルケム社会学の全体を再解釈することを試みた。デュルケムにしたがえば、普遍と特殊、理性と感情、近代と伝統といった既存の対立を総合し、両者の相補的な関係に注目することができる。そしてそれは、こうした二分法的な思考によって排除されていた他者を知ることにつながる。道徳的個人主義は、いかなる人びとにも人格の価値を承認する、開かれた社会を目指すための指針となるものである。

〔報告2〕 小関彩子（和歌山大学）

永遠の真理と変化する実在——デュルケムとベルクソンにおける言語的観念の役割

本発表は、認識の道具としての言語に関して、デュルケムのカテゴリー論とベルクソンの直観理論を比較し、その相似点と相違点を分析するものである。

デュルケムは、動物の住む経験的世界に対して、現実は何ものかを付け加えたもう一つの人間の世界を対置させる。それは概念によって表象される理想的真理の世界であり、しかもそれはある一定の「閉じられた社会」によってはじめて個人に与えられるのである。同様にベルクソンも、言語活動によってもたらされる既成の観念は社会全体によって与えられる共通の要素、したがって非人格的で抽象的な状態であると考えている。その上でしかし、そのような方法で得られる対象認識は、対象の真の本質を捉え得ていない、と批判する。そして、我々が生き生きとした観念よりも死んだ不動の観念の内に留まる傾向にあることを指摘するのである。

もともと、デュルケムのカテゴリー論は、単に知的言語的概念把握をひとしなみに見做すものではない。『原初形態』の結論第Ⅲ部のテーマは、認識の社会的条件である。ここでまずデュルケムは、概念 (concept) と一般観念 (idée générale) とを区別する。知覚や image に与えられたものを比較し、そこから共通するものを抽出し、一般化して観念化することは、個人においても行われることである。しかし、このような「一般的なもの」は特殊なものの中にしか存在しない。それは、単純化され、貧弱にされた特殊である。」

（『原初形態』617）デュルケムは、普遍的なもの (l' universel) を一般的なもの (le général) と峻別し、個別的な諸経験から些末な差異を捨象して (貧弱化して) 共通部分を一般化することからは、普遍的な概念が生み出されることはない、と考えている。

そして、概念が普遍的であるからこそ、それは社会の成員にとって共通のコミュニケーションの道具となり得る。デュルケムは、社会を個人の延長線上に位置づけることはしない。なぜならば、社会的・概念的表象は個人的表象の平均像なのではなく、個人は社会によって与えられた言語の指し示すものの全体を知ることとは決してできないからである。

それでは、このような操作を経なければ、我々は他者と理解し合うことが出来ないのだろうか。デュルケムは、我々は概念を交換することは出来るが、「私の意識感覚」を他者の意識に移し入れることは不可能なのであり、感覚をそのものとして他者に伝達することは出来ないと考えている。（『原初形態』619）しかしながら、ベルクソンは、自己の意識と他者の意識とはそれほど明確なものではないと考える。直観は我々を「意識一般」の中に導入する。そこでは我々人間の意識の相互浸入が、非反省的な共感に表れているのである。（「緒論Ⅰ」27）

デュルケムが社会的理想の特質として挙げる普遍性とは、何よりもまず、変化しないものである。流動する感覚的表象の集積である経験世界とは対照的に、それは定着され、結晶化された思考の様式である。この点で、デュルケムは非常に伝統的な形而上学的真理観に則っている。概念は、単に他者と交換するための道具ではなく、また感覚的経験を整理し意味づけるための枠組み図式でもない。それは、対象の「本質」をあらわすものであり、「真理」なのである。プラトンのイデア論に依拠しつつ、デュルケムは「永遠の相のもの」として考えることこそ論理的思考であると考え、しかも、それは社会によってのみ可能とされるのである。

このプラトンのイデア論こそ、ベルクソンが「死の永遠」(éternité de mort) (『形而上学入門』208) として批判するものである。ベルクソンは、変化を、変化しない実在を基盤として、その上に付加される偶発的な諸属性の変化、として捉えることはしない。なぜならば、変化を変化そのものとして捉えるのでなければ、そこに創造の可能性を見ることは出来ないからである。創造とは、未だどこにも存在しなかった新しいもの、先行する諸条件によってはいささかも決定され、予見されていなかったものを生み出す力である。ベルクソンは、このような創造性を担うことができる唯一の存在は、我々の自我であると考えている。彼は、自我とは、その色合いを変化させつつ、自己に先行する何ものからも解放されて、自己以外の何ものによっても決定されずに、自己の内から行為を生み出すものであると結論した。そして彼は、そのような自我と行為の関係を自由と名づけたのである。

ベルクソンは真に現実をその屈曲に沿って理解しようとする態度を、良識と名付ける。これは、知性によって可能になるのではあるが、しかし、普遍的真理を目指す科学的認識と同一ではない。良識は、あまりにも生硬な論理が現実の微妙さを押し潰しそうになる、まさにその点で立ち止まる。良識とは、過去の経験を要約し結合された結果を超えて、常に新たな状況を展開し、我々に独自の努力を要求する。また、一般的原理から論理的作業によって演繹する推論からも、動的現実には常に微妙に逃れていく。良識は抽象的な一般原理を現実の方向に屈折させるのである。(『良識と古典教育』155)

結局両者の言語観は、現実を永遠不変の相において見るのか、それともダイナミックな変化の相において見るのか、という、非常に大きな問題に集約される。その可否を問うことは本発表の任ではないが、言語的概念の果たす役割を詳細に分析していくことは今後とも意義ある作業であろう。

【第31回研究例会報告要旨】

第1部：自由報告

〔報告〕 飯田剛史（大谷大学）

9.11 テロからイラク戦争への米政策・マスコミ・世論の動態家庭 ——「集合表象—集合力」モデルによるによる解明・試論

1. デュルケムの集合意識論と「集合表象—集合力」モデルの構築

- ・集合意識：「同じ社会の成員たちの平均に共通な諸信念と諸感情の総体は、固有の生命をもつ一定の体系を形成する。これを**集合意識**と呼ぶ。」（『社会分業論』）これは分業と並ぶ社会連帯の不可欠の原理である。
- ・彼の宗教定義（聖なるもの）は、狭義の「宗教」集団を超えて、近代の「民族」、「国家」にも適合し、その理論は、戦争・紛争をもふくむ近代国家の動きを解明する重要な手掛かりとなる。
- ・「われわれの理論は（世界戦争という）悪の形を通して証明されてしまった。」（M・モース）
- ・『宗教生活の基本形態』では、「集合意識」に代わって「集合表象」が頻出し、「集合力」もしばしば用いられる。しかしこれらの概念定義、区別は明確には示されていない。そこでここで、それを明確にして、一つの分析モデルを構築する。

集合表象は、集合意識の表情的・情動的局面であり、集合力はエネルギー的・情動的側面である。集合表象は高情報系として、高エネルギー系である集合力をコントロールするはたらきをもつ。この概念セットを、集合表象—集合力モデルと呼んで、経験的分析のための作業仮説とする。

① 集合意識の二局面

- 集合表象：記号（概念指示）と象徴（情動喚起）
- 集合力：エネルギー、情動は

集合表象は、記号作用と象徴作用という二つのはたらきを通して集合力をコントロールする。すなわち、記号作用はイメージ、言語によって集合意識を表現し、象徴作用によって集合力すなわち大きな情動・エネルギーを喚起し方向づける。

② 集合表象の二作用

- 記号作用：イメージ、概念の指示
- 象徴作用：情動、エネルギーの喚起

③ 世論調査データを集合意識の客観的指標として用いることができる。

2. 近代国家の戦争と聖なるもの

近代の「民族」と「国家」は、聖なる集合意識の次元を獲得する。近代戦争においては、ナショナリズム、国家主義による市民の戦争政策支持が重要条件となる。

9.11 同時多発テロはパニック、悲痛、怒りといった大きな集合的興奮を激発した。大統領の言葉によって「敵」が示されるとこの大きな情動は一つの集合意識に転化する。政策、マスコミ、教育、宗教などの動態プロセスを通して、愛国心が強化され、敵対集団への戦争が正当化され支持された。

3. 9.11 テロからイラク戦争へのプロセス；集合意識—象徴モデルによる解明

2001 年 9 月 11 日に起こったニューヨーク世界貿易センタービルの崩壊とペンタゴンの被害にたいし、ブッシュ大統領は直ちにこれを「テロ」と認定し「テロとの戦い」「自由を守る戦い」を宣言した。大統領支持率は低迷の 50 % 台から一気に 90 % に跳ね上がった。これは集合意識の急激な発生と盛り上がりと言える。

同年 10 月にはテロリストの根拠地とされるアフガニスタン攻撃が行われた。米政府は、振り上げた拳の次の標的としてイラクを攻撃目標にしようとした。イラクのフセイン政権は 1991 年の湾岸戦争以来、潜在敵と見なされており、米政府内で副大統領、国防長官などを含む有力グループであったネオコン（新保守派）にとって既に 1998 年より先制攻撃の計画が策定されていた。ネオコン・グループにとって 9.11 テロ 事件はイラク攻撃の絶好の機会となるものであった。大義名分として、フセイン政権とテロリスト集団との繋がりが主張されたが、その根拠が疑われると、次にイラクによる大量破壊兵器の保有が主張された。これについても明確な根拠を示しえないまま、米政府は、2003 年 3 月にイラク攻撃を開始し、フセイン政権は 40 日余りで崩壊した。

マスコミは、2003 年のイラク攻撃開始まで、米政府によるイラク攻撃の理由を無批判に受け入れた。この時点まで、好戦的記事、番組はマスコミに大きな利益をもたらしたためである。民衆の世論も開戦時まで 70 % 以上の支持率を示した。民衆も愛国的あるいは同胞的連帯意識および正義の戦いという集合的快感に酔っていた。

フセイン政権崩壊後、大量破壊兵器は見出されず、イラクでの混乱は拡大しイラク人死者、米兵戦死者も増大した。米政府の大義名分が色褪せると、マスコミは、新たなニュースバリューとなった政府批判の記事、番組を流すようになり、厭戦気分が高まった。2005 年に入り世論の支持率が 50 % を切り、2007 年に 30 % を下回ると、国民的規模での集合意識はもはや解体したと言える。

イラク戦争の真原因説として、石油利権説、ネオコン謀略説、政軍産複合体説などがあり、いずれも十分な根拠を持つ。しかし 9.11 テロによる集合意識の急激な高まりが、戦争を発動させる不可欠の契機となったということができる。

集合意識、集合力は本来、民衆の力（デモ・クラシー）ではないだろうか。しかし、それが政治権力によって戦争に向けて誘導されると、民衆にとって巨大な惨害をもたらすことがある。この戦争へのコースをどのように防ぐことができるのだろうか。国家による情報独占の防止、言論の自由・公正、民衆の批判精神の保持、戦争責任の明確化、（日本では）平和憲法の保持などいくつかのポイントが考えられるが、それぞれ容易ではない反対条件を持っている。

集合表象—集合力モデルをさらに精緻化し、多様な事例を解明する研究は、現代社会学の重要な課題になると考えられる。

第2部：科研関連ミニシンポジウム

〔報告①〕 江頭大蔵（広島大学）

『自殺論』の解釈史——A. ギデンズの場合

『社会学的方法の規準』は、社会学の研究対象と方法論を明確化してディシプリンの確立をめざすものであり、『自殺論』はその方法を自殺現象に適用して有効性をアピールするものであった。ギデンズは早期から『自殺論』や自殺研究に関心を寄せ、社会学的方法論の文脈でその意義について検討している。彼によると、『自殺論』で示された自殺と他の様々な社会的要因との関係は当時すでに周知のものであり、同書の革新性は、自殺の問題を個人心理学から完全に切り離し、社会的自殺率の分布を「社会構造」的要因（自己本位主義、集団本位主義、アノミー）によって説明したことである。

デュルケームの死後、自立的ディシプリンとしての社会学の立場と、それに対抗する心理学・精神医学の立場の論者との間で、自殺の原因が「社会的」か「心理的・生物学的」かをめぐる論争が展開された。しかし、これは誤って立てられた「疑似問題」であり、実際には個人と社会の間には常に「相互依存関係(reciprocity)」がある。そこでギデンズは、「デュルケームが想定した自殺率を規定する構造的変数は、自殺的パーソナリティの形成と分布に影響する変数と分離することはできない」との立場から、社会構造の問題が直接自殺率に影響するだけでなく、社会化の過程でパーソナリティの形成にも影響するという理論モデルを考案する。そしてその背景には、「パーソナリティと社会構造の間の緊密で複雑な相互依存」という構造化理論につながる発想があった。

後年ギデンズは、構造化理論の構築に関連する文脈においては特に、個人に対して「外在的」で「拘束的」とされる社会的事実の「一面性」を厳しく批判する傾向にある。しかしこの社会的事実の特性は、デュルケームが社会学を生物学や心理学から分節化するために考案した分析的な属性であった。現代ではもはや社会学が生物学や心理学に還元されることはないであろうが、構造化理論的な「総合」は同時に、他の学問分野に対する社会学の分節化の契機をも考案すべきなのかもしれない。報告では、日本社会において経済的指標と強い関係を持つ自殺率について、社会的要因を分離して解析する必要性についても検討した。

〔報告②〕 岡崎宏樹（神戸学院大学）

バタイユのデュルケーム解釈

1937年、ジョルジュ・バタイユは、R.カイヨワ、M.レリス、P.クロソウスキーらと「社会学研究会 le Collège de Sociologie」を結成した。社会学研究会は、デュルケーム学派の宗教社会学の成果に着目しつつも、「未開社会の構造分析」に限定されたこの学派の仕事と、さらに「現代社会」の分析に活用しようとした。カイヨワは戦争を「現代の祭り」として考察し、バタイユはファシズムの熱狂において指導者が聖化される構造を分析した。このように現代の「聖」を学問的に研究する一方で、バタイユは、秘密結社アセファルを結成し、聖なる共同体の創設を試みた。これらの活動は数年で閉じられることになるが、聖という主題に対するバタイユの関心は終生失われることなく、思索はさらに深化してゆく。

そのことは、晩期『宗教の理論』の参照文献に、デュルケームの『宗教生活の原初形態』があげられていることにも示されている。ここでバタイユは「今日、エミール・デュルケ

ームは不当に貶められているように思われる。私も彼の学説からは遠ざかるけれども、その本質部分を維持しないでそうするわけにはいかない」（『宗教の理論』）と述べている。「本質部分」とは、聖への関心であろう。ただし、バタイユは、個人を超えた次元に「社会」を設定したデュルケームの枠組み（個人意識／集合意識）からは遠ざかる。バタイユが設定するのは「非連続性／連続性」という別の枠組みである。両理論の違いは、デュルケームが、宗教や祝祭を、主として社会秩序の創造や活性化の観点から論じるのに対し、バタイユが自我や社会秩序の無化や解体の契機に注目して論じる点によく表れている。バタイユによれば、宗教や祝祭が探求するのは「強烈な生の瞬間」であって、「社会的紐帯を創設する」という目的は「二次的な関心でしかない」のである（『文学と悪』）。

デュルケームは集団の高揚状態を「集合的沸騰」の概念で論じた。一方、バタイユは、「生命の沸騰として表出された過剰エネルギーの運動」を考察する「普遍経済学」を展開した（『呪われた部分』）。ここでは、モースの贈与論（ポトラッチ）も、生命エネルギーの「消尽」の問題として解釈されている。

バタイユは、デュルケーム学派の仕事に接近しつつも、学問分野（ディシプリン）の枠を超えて独自の思想を展開した。社会学の訓練（ディシプリン）を受けていないこの「作家」のことを社会学者とよぶことはできないが、その思考が社会学理論をさらに豊かにする重要な洞察を含んでいることは確かであろう。

〔報告③〕 中島道男（奈良女子大学）

バウマンのデュルケーム解釈

バウマンは、社会学における道德論のチャンピオンとしてのデュルケームに対峙し、道德的＝社会的にとらえるデュルケームのロジックでは、ホロコースト批判ができないと批判している——「社会の規則を破らなかつた人々に不道德という非難は可能なのか」、と。彼は、「個人を道德化する力としての社会」ととらえるデュルケームに対して、「個人の道德性を沈黙させる力としての社会」という考えを対置する。社会化のプロセスは道德的能力の操縦にこそあるのであって、その生産にあるのではない、と。そして、ポストモダニティとしての現代においてはこの個人の道德性が開花する条件が整った、と主張するのがバウマンのポストモダニティ論である。

バウマンのデュルケーム批判は通俗的であり、反論可能といえなくはない。可能態としての社会に依拠していることを考えれば、デュルケーム的視座は社会の倫理的システムに批判的なまなざしを向けることができないわけではけっしてないからである。とはいえ、バウマンがモダニティ／ポストモダニティの落差——のちに、ソリッド・モダニティ／リキッド・モダニティの対比へと変化——を指摘していることの意義を、受けとめなければならない。

デュルケームはディシプリンとしての社会学の根拠を一種独特の实在としての社会——社会の魂としての社会理想——に求めたが、現代ではもはやこれが成立し得なくなっているのではないか。——ホロコーストをモダニティと関連づけるバウマンの議論におけるデュルケーム批判のメッセージは、ここにある。視点は社会から個人に移行させられているのである。

では、そのとき、社会学というディシプリンの根拠はどこに求められるのだろうか？ ディシプリンの再生という課題に関連づけて、若干の展望をしておこう。

ラトゥールは、タルドからインスピレーションを得つつ、actor-network-theory を提唱している。社会ではなく個人が重視され、sociology of the social から sociology of the association への移行が主張されるのである。このとき、デュルケームの論敵であったタル

ドの掘り起こしもたしかに有意義ではあるが、ラトウール自身も *sociology of the association* の系譜に位置づけているガーフィンケルに焦点をあてて、デュルケームからガーフィンケルへの流れを検討することも大いに意義があろう。ガーフィンケルはパーソンズの学生でありながら師に批判的であり、しかもデュルケームに自らの源流をみていた。デュルケームからガーフィンケルへの流れは、デュルケーム/タルドとは違って、デュルケームが現代において孕んでいる可能性を、道徳論というデュルケーム社会学のど真ん中で探るのにふさわしいのではないか。バウマンのデュルケーム批判の趣旨を活かすひとつの途がここにあるといえよう。

〔報告④〕 白鳥義彦（神戸大学）

パーソンズに対するデュルケームの影響

本報告では、タルコット・パーソンズ『社会的行為の構造—第3分冊デュルケーム論』を題材として、パーソンズに対するデュルケームの影響を検討した。

報告では本書での論点をいくつか取り上げて紹介、検討した。パーソンズは、ホップズ問題に関わり、功利主義批判の文脈でデュルケームが同じ問題を論じていたとし、デュルケームによる契約の非契約的要素への注目や、個人と社会との関係への着目を指摘する。また、社会的事実の外在性と拘束性について、これが環境的、行動主義的なものか、規範的なものか、という問いも提起する。アノミー論から敷衍される快樂の限界効用という観点から、「幸福」の理論という視点も示す。科学と倫理、学問の実践性について、「実証科学はただ人間生活をよくするための手段となりうる限りにおいて正当化されるのである」と、デュルケームが学問の倫理性、実践性、有用性を強調していたと述べる。さらに、デュルケームが経験的研究、モノグラフを著したとして評価し、先行研究について、従来デュルケームが方法論に傾斜して読まれてきたと批判する（「デュルケームは、哲学者あるいは弁証家であって、経験科学者ではないといった結論を導き出してはならない。事実は全く逆であって、かれはその当時の最も偉大な経験科学者の一人であった。……デュルケームは、『非現実的な』空間で理論化を試みたり、『怠惰な思弁』にふけることなく、つねに決定的に重要な経験的問題の解決をめざしていたのであり、まさに科学的理論家そのものであった」）。

本書の特色は、学説史的研究の基盤上に、「主意主義的行為理論」という新たな理論学説の提起を行った点にあるが、こうした観点からすると、パーソンズ自らの理論を展開するために、デュルケームを「利用」しているとも考えられる。そのため、デュルケームの議論を持ち上げておいて、「だが」というような形で、その上で批判するという論調も少なからず見られ、表面的に議論を追っていくと、パーソンズがデュルケームを評価しているのかいないのか、両義的に見える側面もある。とはいえ、パーソンズは自分の理論を導くためであるとしても、デュルケームをよく読みこんでいるのは事実である。

パーソンズは、デュルケームによる研究の、モノグラフとしての意義を繰り返し強調しているが、これはシカゴ学派に典型的に見られるような、経験的研究を重視する当時のアメリカ社会学の文脈の中での、自らの研究の正当化を示すという側面もあったのだろうか。また、例えば、パーソンズによる医療、大学、専門職論といったモノグラフ的研究に見られるような、自らの問題関心の一傾向を示すものとしてもとらえられないだろうか。

全体として本書では、主意主義的行為理論の導出ということが主たる文脈となっており、構造（機能）主義、全体論的なマクロな視点、といったような、デュルケームからパーソンズへの影響といった文脈において通俗的に考えられ得るような観点は必ずしも強調されているわけではないということも、今回再読してあらためて感じたところである。

アルヴァックスに対するデュルケームの影響

デュルケーム学派のアルヴァックス（M. Halbwachs）が論じた「集合的記憶」からは、ベルクソンの記憶論への批判を超えて、デュルケームの集合意識もしくは集合表象からの影響を受けていることが読み取れる。そこで、本報告では、そのアルヴァックスに対するデュルケームの影響について取り上げた。

アルヴァックスは、ほぼ忘れてしまったような過去の思い出を他者の記憶に助けられて思い出すが、「集合的記憶」であると言う。集団内部の視点や、思い出の類似性が集合的記憶を説明するが、この視点と類似性はどこで担保されているのか。本報告では、集合的記憶の「時間的枠」(cadre temporel)と「空間的枠」(cadre spatial)によって、集団内部の視点や過去の類似性が担保されると考えた。

たとえば家族という集団は夫婦からはじまり、子どもの誕生、子どもの独立によって集団を変化させ、そこに流れる社会的時間を変化させる。この場合の社会的時間が「時間的枠」である。アルヴァックスは、夫婦独自の生活リズムは、やがて子どもを中心とした生活リズムに吸収されるのではなく、並んで新しい生活リズムが存続する、と説明する。家族に関する思い出は「時間的枠」によって再構成され、「空間的枠」によって保存される。つまり、まず家族の生活は「時間的枠」（日付や時期など）によって想起され、その後、継続する空間的なイメージを持って保存されるということになる。

このように持続する時間を日付によって区切ることは、ベルクソンの持続と対比される「時間の空間化」に他ならない。アルヴァックスは、ベルクソンの「持続」を批判しており、むしろ「時間の空間化」を経て、過去を空間的枠に転回しようとしていると考えられる。

なぜアルヴァックスは時間の空間化を選んだのか。アルヴァックスはベルクソンの「持続」を他者と共有するために、デュルケームの「集合表象」を要請する。アルヴァックスは「持続」を否定しているのではなく、ベルクソンの「持続」を、「時間の天文学的区分や日付」という集合表象に重ねることで「時間の空間化」を生じさせ、社会に委ねていることになる。

ここから、アルヴァックスは「私」という個人の外にいる他の人びとも共通する集合的な状態から社会的事実を取り出そうとしていると論じた。

追悼 大野道邦 先生

小川伸彦（奈良女子大学）

デュルケム／デュルケム学派研究会の、節目となる 30 回目の例会が文京学院大学で開催されたのは今年（2015 年）の春でした。そのころ名誉会長の大野道邦先生は、肺癌の治療を続けておられました。「元気に闘病中」とのお言葉に一縷の望みを託していましたが、ついに 6 月 2 日未明、逝去されました。

長らく神戸大学に在籍しておられた先生は、奈良女子大学文学部に移られた 2000 年にこの研究会を組織されました。＜大野道邦／中島道男／江頭大蔵＞という強力な世話人体制で準備が進められていったのです。先生を迎える形で同僚となった私は、精力的な大野先生のお姿に驚かされつつ、気がつけば研究室で頂く珈琲を楽しみにするようになっていました。「大学はアジール」「卒論は文学部の魂」といった名言も飛び出し、時を忘れていろんなお話をしたものです。

第 1 回研究例会（2000 年 9 月）は、デュルケム研究を高い水準で牽引してこられた中久郎先生（当時 72 歳）をゲストに迎えた講演から始まりました。次の世代にバトンが渡された象徴的な瞬間だったと思います。後日、世話人を代表して大野先生が、この研究会発足の趣旨について次のように書いておられます。

前世紀転換期の古典であるデュルケム社会学、および、その発展型としてのデュルケム学派について調査・研究することによって、現世紀転換期の社会・文化・人間の構造や動態を分析・説明・解釈するための基礎的・原理的なパースペクティブを明らかにしたい。このために、相互啓発的な研究会を定期的に開催する。（『ニューズレター第 1 号』1 頁）

ふたつの世紀転換期を視野に収めた壮大なプロジェクトを始めるのだという力強い宣言です。

それから 15 年が経ちました。「学派」も研究対象であるという大きな構想にも触発され、多様なメンバーが結集しています。新入会者に対しては、各自の研究についてのひとことを添えた大野先生からのメッセージが贈られていました。「拝復 ご入会おおいに歓迎申し上げます」から始まるメーリングリスト上のイニシエーション。入会する側も受け入れる側も気持ちが引き締まり、研究会メンバーの紐帯が再創造されていたのです。

これにとどまらず先生は、節目節目の儀礼的なことを大切にされました。さまざまな行事に季節感のあるスーツとネクタイで登場したり、こちらが恐縮するほど律儀にお礼状やお祝いの言葉をくださったり。しかしそこはデュルケミアン。単なる儀礼主義ではありません。先生独特の照れと気負いと茶目っ気もブレンドされていて、接する人を惹きつけました。

芝居がかっていたところはお母さまの影響かもしれません。「50 年以上も前のこと、大学生になった自分に会うために名古屋から母親が来た。とんでもなくお洒落をして、なんとヴェールまでかぶって三宮の駅を降りてくるのを見た時は、逃げ出したくなった」という話を、目を細めて嬉しそうに語っておられたものです。

生き生きとした文化やシンボリックなものには構造や関係を創造し変革する力がある。このことを、＜独立変数としての文化／強い意味での文化の社会学／生成性／能産的文化＞などの概念で表現されてきた大野社会学。その内奥には、「文化は突然に『沸騰』し一挙に『解体』する」（『ソローキン再訪—文化社会学の可能性』[K.スヴェトラナ氏との共著]147 頁、書肆クラルテ）というラジカルな認識が秘められていました。「解体」といえば、先生が 1941 年にお生まれになったのは中国東北部の鞍山。お父さまは製鋼所の技術者をなさっていました。当時はいわゆる満州国の領内でしたが、その後一挙に瓦解してしまふ。そんな遠い記憶が先生の社会認識に影響をあたえていたのかもしれない。

2013 年の秋以降、抗癌剤治療のため時折入院された病室は、応接室か書斎のようでした。見舞客にはティーカップで紅茶が出され、ベッドの上に散らかっているのはソローキン本の校正グラ……。退院後も強靱な意志力で世界社会学会議（2014 年）の報告準備をされ、娘さんご夫婦に見守られながら横浜で英語発表をなさり、デュルケム命題集企画への寄稿も完成させていただきました。

シンボル論を主軸にした長年のデュルケム研究はもちろんのこと、コントの記号理論 5 部作、構造主義論などのフランス社会学研究、記憶論とその災害研究等への応用、

歌舞伎研究、苦痛や名誉の社会学、現代的ノブレス・オブリージ論など、堅実さと斬新さの両面で常に我々をリードしてくださった先生は、いつもいつも文献の渉猟と調査・執筆をされ、社会学を通して社会と文化と人間のことを考えておられました。

あと10年生きたいねと、奥さまと言葉を交わしておられた先生。享年73。どんなにかご無念だったことでしょうか。私も悔しくてなりません。この研究会としても、喪失のダメージから立ち直るには、まだ時間が必要なのだと思います。

【 会 員 業 績 】

- 安達智史, 2015a, 「多文化社会における女性若者ムスリムのアイデンティティと社会統合——イスラーム、文化、イギリス」『社会学研究』96: 139-64.
- , 2015b, 「イギリスの若者ムスリムたち——『市民であること』の要件としてのイスラーム」『SYNODOS』04 June, 2015. (<http://synodos.jp/international/13631>)
- , 2015c, 「海外の動き——イギリス・ロンドン タワー・ハムレットの若者ムスリム」『Migrants Network』182: 24-7.
- , 2015d, 「情報化時代における若者ムスリムの社会統合——イスラームの<知識>に着目して」『社会学評論』66(3): 346-63.
- 岡崎宏樹, 2015, 「社会学と哲学——パースペクティブとディシプリンを考えるために」『日仏社会学会年報』26: 69-90.
- 小川伸彦, 2015, 「言葉としての「震災遺構」——東日本大震災の被災構造物保存問題の文化社会学」『奈良女子大学文学部教育研究年報』12: 65-80.
- 菊谷和宏, 2015, 『^{コンソヴィヴィアリティ}「社会」のない国、日本——ドレフュス事件・大逆事件と荷風の悲嘆』講談社（講談社選書メチエ）.
- Kitagaki, Toru, 2014, “Eugenics and Psychiatric Medicine,” *Eugenics in Japan* (ed. by Karen J. Schaffner), Kyushu University Press, 34-43.
- 北垣徹, 2015a, [翻訳] ロベール・カステル『社会喪失の時代——プレカリティの社会学』明石書店.
- , 2015b, 「労働者派遣法は《安定》をもたらさない」『図書新聞』3223号.
- , 2015c, 「ロベール・カステル『社会喪失の時代』を翻訳して」『公明新聞』7月6日号.
- 嶋守さやか, 2015, 『孤独死の看取り』新評論.
- 白鳥義彦, 2014, [翻訳] フランソワ・ミュレル著「早期離学者たち、間違いなくフランスおよび他国の学校における課題」『日仏教育学会年報』20（通巻番号 No.42）: 6-21.
- , 2015a, « Réformes de l'enseignement supérieur au Japon et hiérarchisation croissante des universités », ARESER, Christophe Charle et Charles Soulié (dir.), *La dérégulation universitaire : La construction étatisée des « marchés » des études supérieures dans le monde*, Éditions Syllepse (Paris) et M Éditeur (Québec), 105-118.
- , 2015b, « La question du nucléaire au Japon après Fukushima », *Cahier d'histoire immédiate*, Presses universitaires du Midi, 48: 115-131.
- , 2015c, 「デュルケームとナショナリズム、コスモポリタニズム——現代との応答」『日仏社会学会年報』26: 91-104.
- , 2015d, 「新刊紹介 岡山茂著『ハムレットの大学』新評論、2014年」『日仏教育学会年報』21（通巻番号 No.43）: 73-75.
- , 2015e, 「開催校（神戸大学）シンポジウム「古典と現代——社会学におけるデュルケーム学派の今日的意義」『日本社会学会ニュース』2015.1.15、213: 14-16.
- , 2016, 「フランスにおける研究助成体制」『紀要』（神戸大学文学部）43: 75-87.
- 多田光宏, 2014, [翻訳] ジョエル・コーティンホ&クラウディア・クレル「ドイツ青少

- 年研究所の匿名出産及び赤ちゃんポストに関する調査——結論（2011年）」トビアス・バウアー編訳『ドイツにおける「赤ちゃんポスト」・「匿名出産」に関する資料集』（平成26年度科学研究費補助金・基盤研究C「赤ちゃんポストに関する日独比較研究」報告書, 59-69.
- , 2015, 「はじめに——『選択の強制』から4年後の未来で」熊本大学文学部総合人間学科社会人間学コース・2014年度社会調査実習I/II（多田光宏担当班）『「自主避難」という選択——熊本県内の震災・原発避難者の意識と実態 [改訂版]』, 3-12.
- Tada, Mitsuhiro, 2015, “Language as a Zombie Category of Sociological Theory,” Per Wisselgren, Peter Baehr, and Kiyomitsu Yui eds., *International Histories of Sociology: Conference Proceedings of the Research Committee on History of Sociology from the XVIII ISA World Congress of Sociology in Yokohama, 13–19 July 2014*, 371-379.
- , 2015, “From Religion to Language: The Time of National Society and the Notion of the 'Shared' in Sociological Theory,” *The Annuals of Sociology (Shakaigaku Nenshi)*, 56: 123-154.
- 伊達聖伸, 2013a, 「2つのフランスの争い」のなかの社会的カトリシズム——マルク・サンニエ「シヨン」の軌跡1894～1910『上智ヨーロッパ研究』5: 23-42.
- , 2013b, 「シャルル・モーラスにおける宗教的ナショナリズムの思想構造」『年報政治学』2013-I: 122～144.
- , 2014a, 「19世紀フランスにおける市民宗教の諸相——コント、トクヴィル、デュルケム」永見文雄・三浦信孝・川出良枝編『ルソーと近代——ルソーの回帰・ルソーへの回帰』風行社, 127-141.
- , 2014b, 「文学と思想」小倉孝誠編『十九世紀フランス文学を学ぶ人のために』世界思想社, 176-197.
- , 2015a, 「ケベックの文化的アイデンティティと多文化共生の試み」上智大学アメリカ・カナダ研究所編『北米研究入門——「ナショナル」を問いなおす』上智大学出版, 119-142.
- , 2015b, 「社会主義と宗教的なもの——ジャン・ジョレス」宇野重規・伊達聖伸・高山裕二編『共和国か宗教か、それとも——十九世紀フランスの光と闇』白水社, 253-284.
- , 2015c, 「フランスにおけるイスラームの制度化と表象の限界——宗教を管理するライシテの論理」『ODYSSEUS』別冊2（2014）: 35-57.
- , 2015d, 「イスラームはいつ、いかにしてフランスの宗教になったのか」『宗教研究』383: 107-132.
- 鳥越信吾, 2015a, 「時間の社会学の展開：“近代的时间” 観をめぐって」『人間と社会の探求』慶應義塾大学社会学研究科, 79: 83-97.
- , 2015b, [翻訳] アルフレッド・シュッツ、トーマス・ルックマン著、那須壽監訳、大黒屋貴稔、木村正人、鳥越信吾訳『生活世界の構造』ちくま学芸文庫、（担当：第二章 pp. 77-217）.
- 中島道男, 2015a, 『ハンナ・アレント——共通世界と他者』東信堂.
- , 2015b, 「デュルケムの「国家—中間集団—個人」プロブレマティーク」『日仏社会学年報』26: 47-67.
- 古市太郎, 2014, 「経済社会学の新たな方向性——フレキシブル経済の再考と埋め込みとしての社会的承認」『経済社会学年報』（経済社会学会, 現代書館）38: 188-198.
- , 2015, 「社会的連帯」経済社会学会[編]・富永健一[監修]『経済社会学キーワード集』ミネルヴァ書房.
- 三上剛史, 2014, 「社会の余白で考える：モースの贈与論をめぐって」『日仏社会学年報』25: 53-88（荻野昌弘・北垣徹と共著）.

- , 2015a, 「ダブル・コンティンジェンシーと贈与」『ソシオロジ』59(3): 99-101.
- , 2015b, 「シンボリック・メディアの形成とモダニティ——ダブル・コンティンジェンシーとディアボリック・メディア」『追手門学院大学社会学部紀要』9: 85-100.
- , 2015c, 「[書評] 宮島・舩橋・友枝・遠藤編著『グローバリゼーションと社会学』」『フォーラム現代社会学』14: 87-89.
- 溝口大助, 2013a, 「セヌフォ社会における夫方居住集団(ダアラ)の空間概念と実践」『人文学報』468: 29-54.
- , 2013b, 「モース宗教社会学の生成」『宗教研究』86(4): 755-756.
- , 2014, 「夢を通じた個人史と民族史」国立民族学博物館編『世界民族百科事典』丸善出版.
- , 2015a, 「モース——社会主義・労働・供犠」市野川容孝・本橋哲也編『労働と思想』堀之内出版, 129-154.
- , 2015b, 「アフリカの宗教」櫻井義秀編『よくわかる宗教学』ミネルヴァ書房.
- , 2015c, 『ケニア高等教育報告書』日本学術振興会ナイロビ研究連絡センター, 1-301.
- , 2015d, 「金鉱と呪い」竹沢尚一郎編『マリを知るための60章』明石書店.
- , 2015e, 「セヌフォ——その言語、生業、親族、歴史」竹沢尚一郎編『マリを知るための60章』明石書店.
- 流王貴義, 2012, 「『契約における非契約的要素』再考——有機的連帯における契約法の積極的役割」『社会学評論』63(3): 408-23.
- , 2014, 「強制なき協働関係を求めて——デュルケムの有機的連帯概念の理論的意義」『現代思想』42(16): 210-20.
- , 2015, 「『社会分業論』へ至るデュルケムの問題関心——シェフレ受容に着目して」『ソシオロギス』39: 1-16.

§ 編集事務局より §

ニューズレター第16号をお届けします。2015年は、嬉しいニュースと悲しいニュースが交差する年となりました。4月には、本研究会のメンバーで企画を進めてきた科学研究費補助金の申請（研究課題名：社会学のディシプリン再生はいかにして可能か——デュルケム社会学を事例として 研究代表：中島道男）が採択され、デュルケム/デュルケム学派の研究をさらに深化させる意を強くしました。第31回例会のミニシンポジウムも、その研究活動の一環です。しかし6月には、世話人として研究会発足を主導し、のちには会長として私たちを支え、見守ってくださった大野道邦先生が、闘病生活の末にお亡くなりになりました。本号では世話人の小川による追悼文を掲載しております。大野先生のご冥福を心よりお祈り申し上げます。

研究例会は従来通り年2回、そして科研の分科会であるA～Dの4班による研究会もそれぞれ開催されています（科研関連については、科研のニューズレターをご参照ください）。4月には古市太郎会員のご尽力により文京学院大学本郷キャンパスにて、10月には奈良女子大学にて、それぞれ第30回と第31回の研究例会を開催いたしました。報告、コメントをご担当された会員の皆様には、心よりお礼申し上げます。

さて、次回の第32回研究例会は、古市会員のお言葉に甘えて、前々回の開催と同じく交通至便な（地下鉄東大前から徒歩0分）文京学院大学本郷キャンパスにて、2016年4月16日（土）13:00～17:30に開催の予定です。報告は甲南女子大学の芦田徹郎会員（「人格的共同社会と人類的共同社会のあいだ——デュルケムの *culte de l'homme* とサン=テグジュペリの *culte de l'Homme* をめぐって」）、そして科研関連報告ミニシンポジウム（共通テーマ「社会学的方法の規準成立の“周辺”」）を予定しております。会員の皆様の多数のご参加をお待ちしております。